OBOGのキャリアデザイン

愛知医科大学看護学部
小児看護学助教
神谷 美帆さん

挑戦を楽しみながら、看護の道を自分らしく歩み続けています。

愛知淑徳高等学校第52回卒業（平成11年度卒業）。
公立中学校から愛知淑徳高校に入学。J.R.C（青少年赤十字）に所属して校内外でのボランティア活動に励む。愛知医科大学看護学部、愛知医科大学大学院看護学研究科で学んだ後、慶應義塾大学病院に看護師として就職。NICU（新生児集中治療室）で働き、小児看護の専門性を高めたいと考え、平成20年、愛知医科大学病院へ。看護師のキャリアを積み、平成24年より愛知医科大学看護学部小児看護学助教。後進の育成に力を注ぐ。

◆自分らしさを尊重し、高め合う。濃密な3年間は、生涯の宝物。

愛知淑徳高校での3年間は、濃い日々でした。本当に楽しかったと、昨日のことのように思い出されます。"濃い"理由は、互いの個性や価値観を尊重し合える仲間と出会えたから。自分の好きなことを貫き、一人ひとりが持つ世界を大切にする心地よい雰囲気が、愛知淑徳にはあったのです。仲間と話していると好奇心が刺激され、何事にも挑戦しよう！と淑徳魂が燃えました。バレーボール大会や体育祭などでは、クラスメイトの応援もあって、苦手だった運動が好きになるほど楽しく参加できました。愛知淑徳の仲間と学び合い、高め合う中で、人と対話する力、納得いくまでやり通す実行力が、大きく培われたと感じています。

高校2年生のとき、青少年赤十字アメリカメンバーが来校。「愛知淑徳の学校生活やJ.R.Cの活動を英語で紹介し、異文化交流を楽しみました」と笑顔で振り返った神谷さん（後列左から3番目）。

日々の授業や学校行事のほかに力を入れたのは、JRCの活動です。献血の呼びかけ、授産所でのボランティア、手話の習得などに仲間と共に取り組み、2年生のときには交換留学でマレーシアへ。JICA（国際協力機構）の活動に参加するなど貴重な経験を重ねました。JRCの顧問が保健室の先生だったことから、子どもの健康を支える仕事に興味や憧れの気持ちを抱き、看護の道へ進むことを決意。愛知医科大学看護学部に第一期生として入学し、仲間や先生方と一緒に学部を創り上げていこうと、ワクワクして大学生活をスタートさせました。

◆看護師のキャリアを重ねながら小児看護の専門性も追究。

大学時代も自分の軸にしたのが、「チャレンジし続け、自己を成長させたい！」という思い。大学病院に入院する子どもたちの遊びの環境づくり、子育て支援サークルの立ち上げ、医学部と協力した大学祭の開催など、多くのことを仲間と共に成し遂げました。

学業では、より深く学びたいと考えて大学院に進学し、看護の基礎を固めました。修了後は慶應義塾大学病院に就職し、NICU（新生児集中治療室）の看護師として、生まれたばかりの赤ちゃんの看護に全力を注ぎました。そこで実感したのは、年齢や障がいの有無に関係なく、すべての人に備わる「生きる力」の強さや尊さ。その力を引き出し、支えたい、ご家族の笑顔を増やしたいと看護師の仕事に対する熱意を新たにしました。

そして、看護の専門性をより深めながら現場でキャリアを積み重ねるために、愛知医科大学病院に転職。4年間、看護師として働いた後、教員となりました。現場で磨いた技術や医療人としての心を後輩である学生たちに受け渡し、たくさんの人の健康に大きな視野で貢献したいと、今、思いを高めています。

◆すべての出会いに感謝し、看護の道を前進し続ける。

看護学部の助教となって4年目の現在、授業や看護実習の指導、研究活動などに奔走しています。その底力になっているのが、高校や大学、職場で出会った人とのつながりです。恩師はもちろん、仲間やボランティア先で知り合った人など、多くの人の支えのおかげで、看護の道を歩み続けることができると感謝しています。その恩返しができるよう、次代を担う学生たちに伝えているのは、「学びや出会い、経験のすべてが、あなたが前に進む力になる」ということ。今、目の前にある勉強や活動に本気で取り組む日々が、未来を切り拓くのです。愛知淑徳で学ぶ後輩の皆さんも、ぜひ、自分の気持ちにまっすぐ向き合い、勇気を出して新しい一歩を踏み出してください。

「小児看護援助」などの演習では、現場経験を活かしてきめ細かく指導。「学生たちが大学で学んだことを実習先や就職先でも発揮できるよう『あなたなら大丈夫!』と送り出しています」。